
獣人世界の異邦人

猫馬鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣人世界の異邦人

【NZコード】

N4918Z

【作者名】

猫馬鹿

【あらすじ】

目が覚めたらネコミミ付きのオッサンに囮まれてた。・・・何じやそりやあ！一番近くに見えた町に入つてみればいきなり犯罪者扱いされるわ、国の戦争に巻き込まれるわ、帰る方法は解らないわ・・

- ・ヤメツ！考えるのヤメツ！まずは寝所と飯だ。話はそれからだ！

これは本人の知らないうちに異世界トリップをしてしまった少年倉橋宗一郎（一応主人公 本業傭兵、副業高校一年生）と彼の仲間たちの物語である。 *処女作になります。拙い文や駄文になるか

と思いますが読んでいただけた幸いです。以前間違つて短編で投稿してしまったので連載として再投稿させていただきます。

プロローグ 目が覚めたら父親父に囲まれてた（前書き）

以前投稿した分が間違って短編で出てました。申し訳ありませんが、
こつちが本編です。

プロローグ 目が覚めたらネーム親父に囲まれてた

俺は全力で逃げていた。

ん? 何から逃げてるかつて? まあいい、聞いてくれ。

俺は自宅の有る町の端の方にある山にいった。

寝るのにちょうどよさそうな木を見つけたので、木に寄りかかって少し昼寝することにした。

目が覚めるといつの中にやら十人ほどのオッサンに囲まれていた。なぜか鉄製の檜を突きつけられるおまけ付きでだ。

オッサンどもは皆同じ格好だった。

ドクエ辺りに出てきそつた皮の鎧を着ていた。

・それはまだいい

下卑た笑いを浮かべながら、「おとなしくじる。怪しい奴め」とかいつてたが。

・何故かバリバリ日本語話してんだが・・・気にするな問題はそこじゃない

しかも全員が全員やたらと俺の尻を血走った目で見てている。

・もしかしながらも貞操の危機か? どんだけ欲求不満なんだよこいつ等は! 穴なら何でもいいんかい! ・・・しかし一番アレなのはそこじゃない

ココまで聞くだけならコスプレ趣味のゲイ親父が集団でいるだけだ。悪いがその程度なら叩き潰して終わりである。自慢じゃないが我ながら波乱万丈な人生送ってるんだ。その程度なら慣れっこである。無論、無傷で切り抜けるくらいは造作もない。なんでかつて? 言わせんなよ恥ずかしい。

・・・話が逸れた様だ。要するに何が原因で全力で逃げるハメになつたか。

ソレは・・・アレだ。オッサンどもに付けてるペペコ動くネコミミとネコじつぽだ。

・・・ソレがどうしたって？

馬鹿野郎！オッサンにネコ///付けてもキモいだけだろ？
しかもゲイだぞ？ゲイ。

悪いが俺は同性愛に理解はない！男同士ならなおさらだ。

しかもネコ///動いてんだぞ？どういう訳かマジで本物臭いし・・・
以上の理由から俺は逃走することを決めた。なぜならキモ過ぎな上
に貞操の危機のおまけ付だ。

想像してみて欲しい。トロルみたいなオッサンがネコ///ロスプレー
して血走った目で自分の尻見てんだぜ？もう雌に種付けする直前の
雄犬みたいな目でだ。むっちゃ凝視しとるがな！

そりや逃げるよ〜てえか逃げる以外の選択が無いわ！

そう判断した俺は懐から携帯のカメラでフラッシュをかまして、妖
怪ネコ///親父（仮）がひるんだ瞬間に全力で逃走した。

そして、冒頭にいたるという訳なんだが・・・一言言わせて欲しい。

「どうなつてんのか誰か説明しろ！チックショーーー！」

プロローグ 目が覚めたら父「親父に囲まれた（後書き）

拙い文ですがこれからも読んでいただけると幸いです。

プロローグ2 在る少年の数時間前の日常（前書き）

今回は宗一郎が異世界に迷い込む数時間前のお話です。

プロローグ2 在る少年の数時間前の日常

・・・話は数時間前に遡る・・・

「はああああ。やはり猫はいいなあ・・・。癒される。」

俺は教室で雑誌を読みふけっていた。（ちなみに読んでる雑誌は月刊猫の友五月号だ）

現在、絶賛授業中なのが新学期（つつても出席日数足りなくて留年してるが）なので気にしない。

理由なんぞ言つまでも無い。過去受けた授業なんぞ聞く気が無いからだ。

ちなみに去年の成績自体は中の上だつたりする。出席日数自体が足りなかつたから留年しただけだ。

・・・まあその事で半ギレの義姉あねには殺されかけたが・・・いや志れよう。アレは黒歴史だ。

「はい、今日は授業はここまで。明日はこの続きからだから予習しつけよ。」

授業を担当していた教師はそつこつて教室から出て行つた。やつと授業が終わつたようだ。

キーンゴーンカーンゴーン

チャイムが鳴つた。現在六時限目だから今日はここまで終わりだ。席を立とうとした時、知り合いが近づいてきた。

「宗一郎、また授業中に雑誌読んでただろ。」

こいつの名は相良礼一。180程度の身長に黒田黒髪、顔は一枚目半で体形はいわゆる細マッチョだ。

我が友人にして戦友、共に現在日本唯一のPMCに籍を置くれつき

株式会社

とした傭兵だ。

「別にかまわんだろ？一度も同じ内容聞く気無いしな。そんな暇あつたら猫ながめとく方が精神にいいからな。んで、用件は？」

「・・・まあいいか。隊長どのから連絡だ。しばらく待機だよ。いつでも出れるよう準備はしとけとよ。」

「ふーん。近い内にまたテロ組織制圧戦でもやるのかね？俺としては大歓迎だがな。ここにいると腐つちまいそうだ。」

「・・・まだお前はこっちの生活には慣れないのか？」

「まあな。五年近くゲリラやってりやあこの国は平和すぎら。ここ卒業したら本格的に傭兵になるかね。一番手馴れてるしな。」

「おいおい、瑞樹姐さんが泣くぞ？いい加減血生臭い世界から足洗えってな。」

「関係ないな。俺はすでに壊れてるからな。それに殴り合ひならともかく殺し合ひなら俺が勝つ。」

「はあ・・・俺みたいに家庭の事情で傭兵をやらいざるを得ないならまだしもお前は違うだろ？おじさんもいってたんだりつ。いつでも辞めていいって。」

「？なにを勘違いしてるんだ？俺は好きで傭兵やってんだよ。義父おじさんには悪いが、ね。少なくとも今は、そういう世界に片足つっこんどかねえと正氣が保てんよ。あと猫力フェな。アレが無いと正直この生活キツイわ。」

「さらつと妙な物混ぜるなよ。お前が猫馬鹿なのはよく解ってるから。でか猫力フェと戦場同列に並べんな。まったく方向性が違うだろうが。」

「俺にはどっちも必要なんだよ。刺激をくれる戦場と癒しをくれる猫はな。用件はそれだけか？んじや俺は帰るぜ。」

俺は席を立ち教室から出た。

「・・・やれやれ・・・戦場で育つてえのは厄介なものだな。はあ・・・姉さんになんて言おう・・・」

宗一郎が立ち去った後、俺はため息をついた。

宗一郎の事情を知らない奴から見ればあいつはイカれた戦争狂にしか見えない。ソレは紛れも無い事実だ。

だが、偶然にも俺は知ってしまった。知つている以上見てみぬ振りするわけにもいかない。主に個人的な理由で、だ。

まず、俺が死にたくない。傭兵会社PMCの仕事中、俺と宗一郎は歳が同じことも有りよくコンビを組まされるのだが、宗一郎は拳銃しか使わない変わり者だ。マシンガンやアサルトライフルは意地でも使わない。

間違えなく変人の類だ。射程にせよ面制圧力にせよ拳銃は前記の二つには遠く及ばない。

射程ではアサルトライフルに、面制圧力では両方にそれぞれ劣つてゐる。現在の軍隊やテロリストがメインで使つてている銃器は上記の二種類だ。

ということはだ。戦う場合、相手の射程内に入る事が大前提となる。俺ごと、弾丸の雨の中に飛び込むのだ。いつ流れ弾で死んでもおかしくない。

もう一つは・・・まあアレだ。あいつの姉貴に頼まれたのだ。

それもあるがあの人を泣かせたくない。主に身の危険的な意味で・・・

「ま、がんばりますかね。将来の弟君（仮）の為に・・・つと

俺は瑞樹の姉さんと合流するため町に繰り出した。

「はああ。義姉あの人にも困ったもんだ。さてどうするかね？」

俺は当てもなく町を流離つていた。

言いたいことは解るのだ。

ゲリラをやつていたのは必要に迫られたからだ。出来なければ俺が殺されるか死ぬまで慰み物にされているかどちらかだつたからだ。

発展途上国の反政府ゲリラなどそんなものだ。

獸性むき出しで殺しあうのが戦争というものだ。ゆえに紳士の軍隊やゲリラはない。

唯一の救いはそのゲリラが圧政を敷く独裁政権に対する反政府レジスタンスだった事ぐらいだろう。

まあそうだとしても前記の通りな点に変わりは無い。卑怯だの外道だの罵る奴もいるだろうが、そいつは頭があめでたいのだろう。正々堂々なんて方法が取れる奴は力が強い奴だけだ。弱い奴が強い奴に勝とうとするなら手段を選んでる余裕は無い。戦いは勝たなければ意味が無いのだから。負ければ全て失い踏みにじられるだけなのだから。

話を戻そう。要するにそんな環境で生きてきた人間の価値観は平和な国で生きてきた人間にとつてはひどく歪んでいるのだろう。後者である義姉は前者である俺を前者の価値観に矯正したいのだろう。まあ、あそこに着いたばかりの俺ならともかく今の俺には何をしても無駄だが。現に今も似たような事してると訳だし。辞めさせたいんだろうなあ。まあ生の実感つて奴を得られん生き方なぞ今更御免こうむるが。

「さて、どうするかねえ・・・。義姉貴あねきと顔合わせてもいつも通り

説教と格闘戦にしかならんだろうし・・・」

前にも言つたが殺し合いなら勝機は十分ある。信じられないかもしれないが、義姉に格闘戦で勝てる奴など少数派だ。ぶつちやけた話、世界クラスの上から二十人ぐらいだろう。冗談抜きで化け物だ。強いて言うなら殺し合いの経験が無いことぐらいしか救いが無い。ま

あそれゆえに殺し合になら俺が勝つといつ話になるのだが。必要なモノがまるで違うし。

「・・・山にでも行くか。久しぶりに黄雀て来よう。今日は野営だな。荷物取つてこねえと・・・」

俺は久しぶりに町の西端から山に登る事にした。

その選択がどうこう事になるのかも知らずに。

プロローグ2 在る少年の数時間前の日常（後書き）

近いうちに登場人物紹介書こうか思案中です。そのうち番外編扱いで書こうかと思いますが、宗一郎君の過去は地味に重めです。

某漫画の花のコードネームの犯罪請負人みたいなやつです。瑞樹さんはもうちょっと先に登場させる予定。礼二君も再登場は同じ位を予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4918z/>

獣人世界の異邦人

2011年12月16日19時52分発行